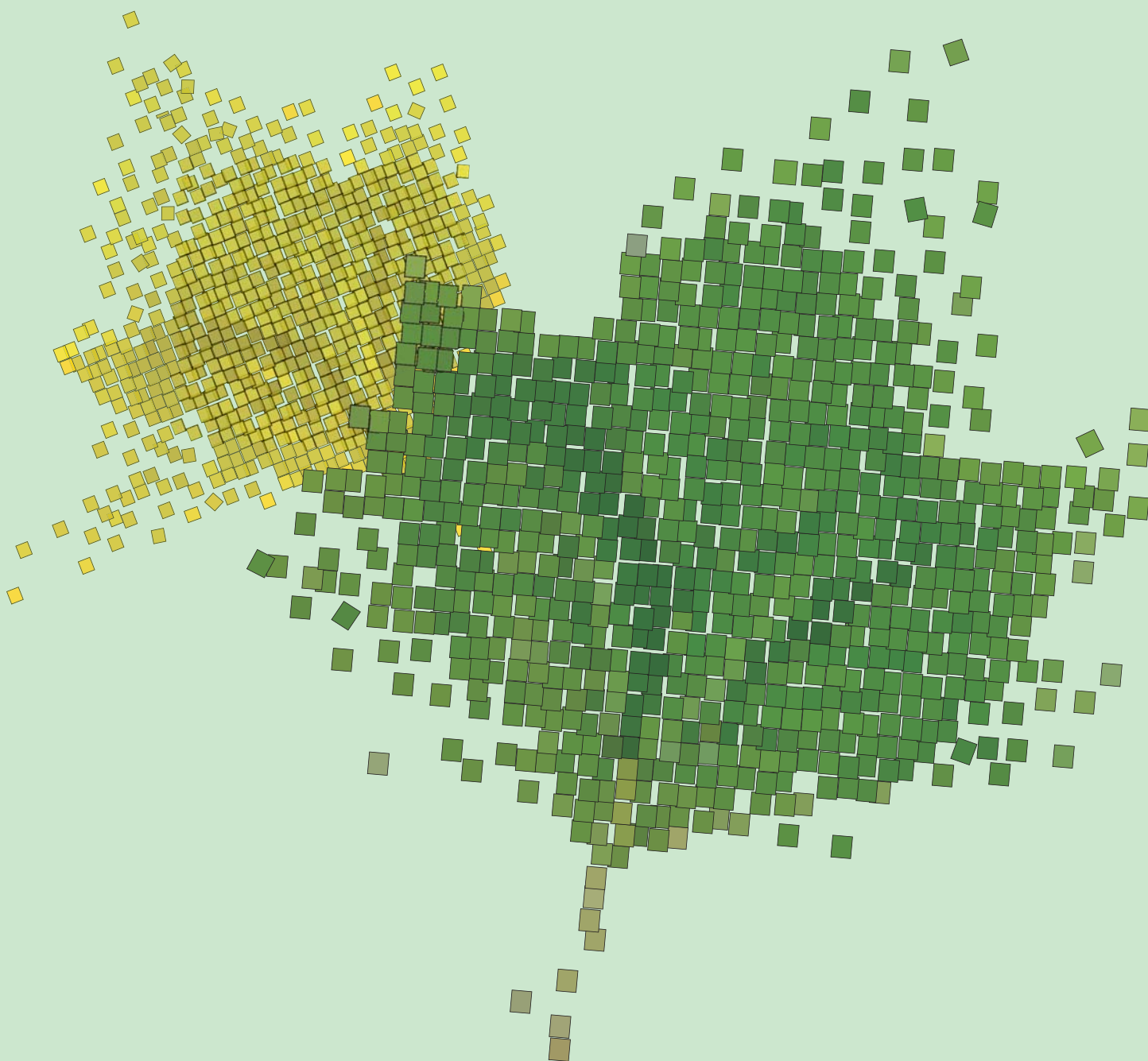


# プラテュス *πλατύς*



■ 巻頭言 「自分は何者か, 何処へ行くのか」 副研究院長 千葉 仁志 .....	1
■ 研究室紹介 「基盤看護学分野 看護管理・看護教育研究グループ」 基盤看護学分野 教授 良村 貞子 .....	2
■ 寄附分野紹介 「食品機能解析・保健栄養学(渡辺オイスター)分野」 特任准教授 布田 博敏 .....	3
■ 海外便り 「ストラスブール滞在記」 医用生体理工学分野 助教 堤 香織 .....	4
■ 学生便り 「第4回保健学科祭“NORPL2010”を終えて」 作業療法学専攻3年 庄子 翼 .....	6
■ 受賞報告 「日本臨床化学会奨励賞を受賞して」 博士後期課程1年 櫻井 俊宏 .....	7
■ 報告事項 .....	8



## 自分は何者か, 何処へ行くのか

大学院保健科学研究院 副研究院長 千葉 仁志



自分は何者か, 何処へ行くのか。といっても哲学ではありません。大学の中期目標・中期計画・現況分析の話です。

国立大学法人の第1期中期目標・中期計画期間は2004年度から2009年度までの6年間で、他の学部(医学部保健学科を含む)・大学院等では2007年度に中間評価を提出しております。

2008年度に設置された保健科学研究院・保健科学院は2008～2009年度の現況分析をこのたび初めて提出しました。業績評価では部局自身による「期待される水準を大きく上回る」、「期待される水準である」などの段階判定を含んでいて、そのエビデンスとなる資料作成のために多くの教職員の多大なご協力がありました。この場を借りてお礼申し上げます。

国立大学法人は、このように、PDCA(Plan-Do-Check-Act)サイクルを螺旋的に繰り返して、継続的に向上するマネジメント手法をとっています。この手法はISO(国際標準化機構の品質マネジメントシステムの国際規格群)を始めとする様々な管理システムに取り入れられています。ISOが外部評価機関の審査による認定・認証を伴うように、大学の現況評価もまた大学評価・学位授与機構という第三者機関による客観的な段階判定を受けます。

中期目標・中期計画・現況分析は、言わば、大学という船を正しい目的地へ向かわせるための航海システムのマネジメントです。しかし、船出の前に問われるのは、「自分たちの目的地はどこか?何のためにそこへ行くのか?」という基本的な問いかけです。「マネジメントの発明者」と呼ばれるドラッカーは、「何を成すかという戦略を決める前に、自分の存在は何か、自分の事業は何かを問え」と説いています。今回の現況評価も、保健科学研究院・保健科学院の「目的と特徴」の項目から書き始められています。

現況評価(研究)のその部分を引用すると、「本研

究院は、保健科学に特有の視点や手法を用いて保健・医療の向上に貢献するとともに、学際的研究を推進して世界に情報を発信し、保健科学・健康科学の世界的研究拠点を目指す」とあります。その前段に、北海道大学の研究目的として、「(略)既存学問分野において国際的に高く評価される研究成果を示すとともに、先端的、学際的、または複合的な領域において、新しい時代の規範及び新規学問領域創成の萌芽となる研究を開拓する」と述べています。「世界」、「学際」、「保健科学」、「健康科学」、「創成」がキーワードです。今回の現況評価では、2008年度と2009年度の2年間で、この目標に沿って研究の向上があったことを示すエビデンスを提出することができました。

また、現況評価(教育)では、「本学院は、高度な専門的判断能力と医療技術の実践能力を身につけた、保健医療の発展を担う高度医療専門職者および保健科学研究をリードする教育者・研究者を育成することを目的としている」と述べています。教育者・研究者の育成が基本目標の一つとして掲げられている点に注目をしていただきたいと思います。全国的に保健科学領域の大学院設置が進んだことにより、保健科学領域の教育者・研究者の選考は益々競争的になってまいります。教育目標の達成のためにも研究活動の向上を急ピッチで進める必要があります。

保健科学研究院・保健科学院の目標はこのように定まりました。ところで、「自分は何者で、何処へ行くのか」という問いは、教職員や学生がそれぞれ抱えているものではないでしょうか。もし、個人の目標と保健科学研究院・保健科学院の目標とがうまく合致できるならば、大学と個人の絆も強まり、それぞれの目標の達成が促進されるに違いありません。この機会に、個人のもっとも基本的な目標について、じっくりと考えることも大切ではないでしょうか。

## 研究室紹介

### 基盤看護学分野 看護管理・看護教育研究グループ

基盤看護学分野 教授 良村 貞子

本研究院の看護学に関する研究分野は、基盤看護学分野(基礎看護学・看護管理学・看護教育学・成人看護学・老年看護学・精神看護学)と創成看護学分野(母性看護学・小児看護学・助産学・地域看護学・在宅看護学)に大別されています。しかし、各分野内での研究活動にとどまらず、基盤看護学分野と創成看護学分野の教員が共同で、また健康科学やリハビリテーション科学など他分野との共同研究も多くみられます。

本稿では、基盤看護学分野に所属し、基礎看護学・看護管理学・看護教育学を担当している「看護管理・看護教育研究グループ」について紹介したいと思います。本グループは現在5人の教員と修士課程2年の大学院生が2人います。

本グループの共通課題には、学部学生に対する、すなわち、看護基礎教育における効果的な講義・演習・実習プログラムの開発および評価があります。その成果は、「看護過程の理論的枠組みと実践の統合を目指した帰納的教授方略の効果」「模擬患者を活用した実技試験プログラムに関する検討」「複数の患者を受け持つ看護管理学実習の展開」等として発表しています。

次に各教員の主たる研究課題ですが、良村は、医療事故判例分析に基づく看護職者(保健師、助産師、看護師等)の法的責任に関する研究をライフワークとして行っています。ここ数年、日本の医療の危機的状況が多く報道されています。厚生労働省の医政局長通知にみられるように、看護職者には役割の拡大と、チーム医療のキーパーソンとしての活動が期待されています。役割遂行には当然責任も伴います。高度化複雑化している医療の中で、看護職者の実務内容の分析とその責任に関する研究は、看護職者の専門性の向上に寄与するものと考えます。

岩本幹子准教授は、看護管理学と看護教育学の両者に主軸をおき研究活動を推進してきました。研究成果としては、「大学病院において看護師長が体験する倫理的問題」「大学病院看護師の倫理的問題への対処法と教育ニーズ」、「基礎看護学における統

合学習プログラムの評価」等があり、修士課程の専攻共通基礎科目の医療倫理特論を担当しています。

矢野理香講師は、脳血管障害患者の手浴に関する看護技術について、実践的なアプローチから患者の身体へ及ぼす効果について研究しています。その他の成果には、看護基礎教育に特化した「評価基準を活用したポジショニングの学習成果」「自己評価能力育成に向けた記録用紙の検討」「マンシエツ装着動作の分析」等があります。

渡辺玲奈助教は、看護管理学と工学(建築学)を融合した学際的な研究に取り組んでいます。F. ナイチンゲールは、環境を整えることが患者の自然治癒力を高めると著述しました。渡辺助教は、環境の側面から看護の質を保証するために、病院建築を視座に看護師の業務の実際と担当患者の看護必要度等からの分析を行っています。その成果は「急性期病棟における患者の病床配置と看護必要度との関連」「急性期病棟におけるシミュレーションによる看護拠点の機能および数の検討」等にみられます。

下田智子助教は、北大病院で医師、言語聴覚士、管理栄養士等とのNST(Nutrition Support Team)活動を通じて、食道がん患者の術後の栄養管理に関する研究に取り組んでいます。また、医用生体理工学分野の小笠原克彦教授が主宰している「高度遠隔健康相談システム」の開発チームにおいて、看護師の立場から住民ニーズと健康相談に関する研究を行っています。



看護管理・看護教育研究グループ

平成22年3月には1期生として、佐々木壽子さんと辻佑介さんが修士課程を修了しました。佐々木さんは「新人助産師の与薬ミスを予防するための先輩助産師の支援—分娩の誘発および促進時の助産管理—」について、医療事故を予防する観点から効果的で組織的な管理体制について具体的に提言すべく、構成面接法により調査を行いました。また、辻さんは「看護師の二交替制夜勤における休憩と疲労との関連」を、主観的疲労とフリッカーテストを用いた客観的疲労の測定から分析しました。今後、両者と

も国内外の学会誌等に発表予定です。

現在、2期生の中山絵里子さんと吉田祐子さんは、助産師および看護師のキャリア発達に着目した研究課題に取り組んでいます。掲載した写真は現在のグループメンバーです。

今後は、北大病院看護部と一層緊密な協力体制のもと、教育および研究活動の更なる発展を目指し、看護基礎教育から新人教育へ、さらに専門職業人としてのキャリアパスに関する、継続的で効果的な教育のあり方を共同研究していく予定です。

## 寄附分野紹介

### 食品機能解析・保健栄養学(渡辺オイスター)分野

特任准教授 布田 博敏



食品機能解析・保健栄養学(渡辺オイスター)分野は、平成22年1月より2年間の期限で設置された寄附分野です。設置と同時に同分野の特任准教授として採用され、千葉仁志教授(病態解析学分野兼任)とともに、食品(健康食品を含む)・食品素材の疾病予防効果について、脂質代謝及び酸化ストレス代謝の観点から研究を進めております。

経歴としては、平成3年に北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学科博士課程にて水産学博士号を取得後、日本学術振興会特別研究員、科学技術庁特別研究員を経て、平成10年に渡米し、メリーランド州ベセスダにある米国国立衛生研究所(National Institutes of Health, NIH)にて11年余り研究生生活を送りました。その後、千葉仁志先生のご尽力もあり、日本に帰国し、特任准教授としての職を得ることが出来ました。

以下に、食品機能解析・保健栄養学(渡辺オイスター)分野での主な研究内容、研究計画を記述します。

#### 【主な研究内容】

欧米並みの食文化によって、わが国でも肥満者が増加し、それによりメタボリックシンドロームの患者数も急激に増加しました。非アルコール性脂肪性肝疾患(nonalcoholic fatty liver disease, NAFLD)は肝臓におけるメタボリックシンドロームの表現型と考えられ、単純性脂肪肝と非アルコール性脂肪肝炎(nonalcoholic steatohepatitis, NASH)に分けられます。NASHは飲酒歴がないのですが、アルコール性肝障害に類似した脂肪肝から進展し、その半数で線維化が進行し、5 - 20%が肝硬変に進行する疾患です。NASHの発生機序にはいくつか考えられていますが、活性酸素種の産生とその消去系のバランスが崩れることで生体が酸化へと向かう状態であるところの「酸化ストレス」の重要性が報告されています。酸化ストレスを軽減する一つとして、ビタミンEなどの抗酸化物質の多量投与(抗酸化療法)の有効性が報告されていますが、推奨度の高い予防・治療法(薬)は十分に確立していません。寄付者である「渡辺オイスター研究所」が力キを使った健康食品会社であることから「力キ中の抗酸化物質によるNASHの予防」を研究目的としています。

#### 【研究計画】

- a. Oxygen Radical Absorbance Capacity (ORAC)法による抗酸化物質の検索  
食物中の抗酸化物質の測定法はこれまでに様々

な報告がされていますが、どれも一長一短があり、統一または公定法化(分析値の妥当性確認)された方法はありませぬ。しかしながら、米国ですでにORAC値を表記したサプリメントや飲料が上市されており、また日本でもORAC分析法の公定法化の研究を行う研究会(Antioxidant Unit研究会)が出来ています。この世界標準となりつつあるORAC法により抗酸化力の測定をし、カキ中の抗酸化物質の検索を行っています。ORAC法の利点としては、実験操作が簡便で、水溶性、および脂溶性のどちらの分画も測定でき、また一回の測定で抗酸化作用の持続時間とその力価を合わせて評価できます。

#### b. 肝細胞培養系における抗酸化物質の探索

今のところNASHの診断基準として、肝生検診断による肝臓の「線維化」、「脂肪滴」、「炎症」等の観察がありますが、NASH研究に用いられる細胞培養系(株化細胞)においては細胞の線維化を観察できる

よい系がありませんでした。しかし、最近、コラーゲンを産生しないものとしてきた肝臓の細胞培養系(株化細胞)において、脂肪酸(オレイン酸)とTGF $\beta$ を培養液に添加することによって、肝細胞の脱分化および線維化が起こり、コラーゲンを産生することが報告されました。この細胞系を用いて期待される抗酸化物質またはその物質を含んでいる分画を培養液に添加後、コラーゲン産生の抑制度を観察することによって、NASH予防に効果的なカキ中の抗酸化物質の探索ができると考えています。

#### c. NASHモデルマウスへの抗酸化物質の経口投与

NASHを実験的に発症させたマウス(NASHモデルマウス)にカキ中の抗酸化物質またはその物質を含んでいる分画を経口投与し、実際にNASH予防効果が得られるかどうかを観察することを計画しています。

## 海外便り

### ストラスブール滞在記

医用生体理工学分野 助教 堤 香織

今年の1月末から3月末までフランスの北東の街、ストラスブールに滞在してきた。きっかけは当分野のS先生のご提案。昨年11月に急遽行くことを決めたため、大慌てで研究室選びを開始した。手当たり次第に興味のある研究室にメールを送り、お返事を待った。難航するかと思ったが、意外にも2週間ほどであっさりと行き先が決まり、先方がクリスマス休暇に入る前にはある程度の手続きを終えることができた。最もお返事が早く、そして好意的な文面。これが決め手。「一番最初に手を挙げてくれた球団に決めていた」と言ってマリナーズから阪神タイガースへ移籍した城島選手の心境に似ている?

年が明け1月25日の夜。極寒のストラスブールの地に降り立った。荷物を待っていると、迎えに来てくれたラボの方が声をかけてくれた。空港から市内へは車で20分ほど。フランス語訛りの英語と日本語訛りの英語で互いを探り、途切れ途切れの会話をしながら2ヶ月間の仮住まいに向かった。車窓には、暗いながらもアルザス風の建物が並んでいるのがよくわかる。不思議な緊張感でその景色を眺めた。無事

に部屋の鍵を受け取り、旅の疲れとともに深い眠りに就く・・・予定であったが、想像を超える寒さである。根っからの道産子は室内の寒さにめっぽう弱い。結局ほとんど眠ることが出来ず、翌朝、シャワーで暖をとることになった。ようやく生き返り、さてシャワールームを出ようと思ったときである。シャワールームの扉が開かない。鍵はかけていない。結局、扉としばらく格闘した後、大声で助けを呼び、1時間後に救出されるという一大事となってしまった。これが初日の朝のことである。



Petite Franceにて

ラボの人たちはとてもいい方ばかりだった。私の滞在先はストラスブール大学の中でもフランス国立衛生研究機構に属する研究室。大学キャンパスから離れたところに独立した棟が建てられていて病院と隣接している。建物自体は決して大きくはないが、その中に100名ほどの研究員が出入りをしており、動物実験を含め、放射性同位元素を取り扱う実験も全てこの建物内で出来るようになっていた。私はここを訪れた初めての日本人となった。迎え入れてくれたのは、3年前に立ち上がったばかりの小さな研究室。悪性神経膠芽腫の効果的な分子標的治療を目標に、血管新生関連分子について基礎から臨床まで幅広く研究を行っている。ポスの印象はメールでの印象通りだった。私が短い滞在期間内に効率的に実験が出来るようにと、綿密なプログラムを組んでくれていた。また、小さな研究室だったことが幸いして、全てのミーティングに参加することが出来、また手の空いているときには全ての実験を見学し、可能なときには実際にその作業に加わることができた。新しいことを学生のように事細かに教えていただけただけのことは何より有り難かった。特に、動物実験のノウハウを身につけることが出来たことは最大の収穫だった。



研究室の仲間

ラボでの平均的な一日の流れはこうである。9:00 出勤、各々仕事の準備をした後コーヒータイム。雑談からはじまり、前日の実験結果の確認とその日行う実験の確認。10:00 仕事に散る(待ち時間ゼロの効率的な実験スケジュール)。13:00 ラボメンバー全員で食堂へ。13:30 ラボに戻ってコーヒータイム。14:00 仕事再開。18:00 退勤。月曜日と木曜日の朝はプロジェクトチームのラボセミナーとリサー

チミーティング。といった感じである。これをみると優雅な一日のように思えるかもしれないが、この仕事時間で、翌日には相当量のデータを出してくるというマジック。私はこのペースについて行けず、後半の1カ月は皆よりも1時間早く出勤をして仕事の準備をしてからコーヒータイムを迎えるようにしていた。にも関わらず、どんなに頑張っても最後に帰宅するという毎日。日本人であることを変なところで実感した。JournalのReviewやセミナーの発表、シンポジウムへの参加。帰国の朝まで休まることのない理想的なラボ生活を送ることができた。

仕事以外の時間は、街の探索、音楽鑑賞、美術館巡り、それから近郊の街へと足を伸ばしてアルザスの空気を楽しんだ。ストラスブールという街はドイツ国境に隣接していて、歴史的にもフランス領とドイツ領を行ったり来たりしている土地柄であることから、フランスとドイツが混ざり合った独特の文化を持っている。フランス的なワイン、チーズ、ショコラ、そしてドイツ的なビール、ソーセージ・・・文字通り美味しいとこどりの街である。女性には『毒』としかいいようがなく、おかげで滞在中にすっかり太ってしまい、今はその改善に必死である。実はこのプライベートの時間こそが最も記したい内容なのであるが、これを語り出したら止まらない。ここでは字数に制限があるため、泣く泣く大きく割愛する。

あっという間の2ヶ月。帰りの空港へ向かう車の中、2ヶ月前に迎えに来てくれたラボの方との会話が途切れることはなかった。搭乗カウンターの前でフランス風の挨拶で別れを告げた。この僅か2ヶ月という時間は、私にとってとても貴重で有意義な時間だった。この滞在を今後の教育・研究生生活の大きな糧とし、また、ストラスブール大学との継続的な連携によって、この滞在のアウトプットを形あるものとしていきたい。最後に、このような素敵な機会を設けてくれたS先生、そして分野の先生方、事務の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げて私の「ストラスブール滞在記」を締めたい。

## 第4回保健学科祭“NORPL2010”を終えて

第4回保健学科祭実行委員長

作業療法学専攻3年 庄子 翼

人々の「暮らし」と「健康」をテーマに、北海道大学医学部保健学科の学生が主体となり独自に開催している保健学科祭も、2007年度にスタートして以来4回目を迎えました。

本学科祭の題名である“NORPL”とは、保健学科の各専攻のNursing(看護学), Occupational therapy(作業療法学), Radiological technology(放射線技術科学), Physical therapy(理学療法), Laboratory medical technology(検査技術科学)の頭文字をとったもので、この大学祭を通して改めて保健学科全体が一つになるという願いを込めて、この言葉を採用しました。

さて、今年度の“NORPL2010”は6月4～6日の日程で行われ、延べ800人ほどのお客さんにお越しいただき、様々な企画を楽しんでもらいました。

本学科祭のメイン企画である「特定健診体験」では、身長、体重、血圧など健康診断ではなじみのある測定はもちろんのこと、超音波(エコー)、心電図、肺活量といった医療機器を用いた測定まででき、子どもからお年寄りまでたくさんの来場者に体験してもらい、満足していただきました。なかでも骨密度の計測が注目を集め、列をなすほどの人気ぶりでした。

作業療法に関連した企画である「籐細工体験」や「逆さめがね体験」のコーナーも大変人気で、連日盛況した様子でした。「籐細工体験」は、籐を織ってキャンディーボックスを作るというもので、参加者は親子連れが目立ち、お子さんと一緒に親御さんも楽しんで作っている様子が印象的でした。「逆さめがね体験」は、かけると左右が逆転したり、上下が逆転する眼鏡を用いて、書字や豆つまみ、歩行の体験ができるというもので、特に学生や子供たちに人気でした。普段できない体験からか、はしゃいだり面白い反応が率直に表れていたため、実行委員としてとてもやりがいのある企画でした。

理学療法に関連した企画である「障がい体験」では、参加者に車いすに乗ってもらったり、義肢装具をつけて歩いてもらったりすることで、健常者では想

像できない感覚や日常生活の困難さを実際に体験し、感じてもらいました。

その他、模擬店や国際協力をテーマにイベント企画・運営を行っている学生団体「サンティエ」によるカフェ・フェアトレードも本学科祭による企画として一緒に盛り上げてくれました。また、5日の昼に行われた「コーラ早飲み大会」は、学生を中心として白熱した戦いを見せ、場を大きく沸き立ててくれました。

第4回保健学科祭“NORPL2010”を終えて、私は市民の「健康」に対する興味・関心が非常に高いことを運営していて感じ取ることができました。「特定健診体験」では、病院代わりの“診察目的”で訪れる人も少なくなく、私は健康なのですか?異常はないのですか?といった質問が多々見受けられました。もちろん私たちは学生なので診察はできませんし、不確かな知識で安易な言葉をかけることはできません。しかし、そのような、来場者のストレートな質問から分かるように、当然誰も自分の身体について知り、健康状態を把握しておきたい気持ちがあるということを感じました。また同時に、そのような人々の気持ちを受けて私は、専門職として将来市民の気持ちに応えられるような知識と技術を身につけなければならないし、そのためにこれからもっと勉強しなければと、学業に対するモチベーションを高められたように思います。

最後に、この保健学科祭が、足を運んでくれた一般市民のみなさんと実行委員の両者にとって意味のあるものとなるように、来年、また再来年と継続されていくことを心より願っています。



保健学科祭実行委員のメンバー

## 日本臨床化学会奨励賞を受賞して

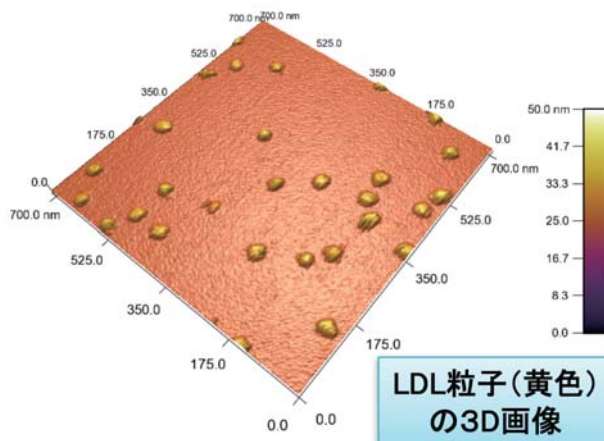
大学院保健科学院 博士後期課程1年 櫻井 俊宏

この度、私の「リポ蛋白の粒子径計測法の開発」についての研究成果が評価され、日本臨床化学会奨励賞という賞をいただくこととなりました。

保健学科一期生ということもあり、先輩がいない環境でほとんどの実験を一人でこなさなければならなかったり、初めて触れる装置に戸惑ったりと、決して簡単な道ではありませんでした。思えば、その境遇が私自身を成長させたのかもしれない。

本研究は情報科学研究科との共同研究で、医工連携で新しい測定法の開発を試みることを目標にしています。最近では計測したリポ蛋白粒子(LDLやHDL)を3D表示できる装置(原子間力顕微鏡)を用いて、暗い部屋で作業しています(写真参照。もっとも、その暗い部屋を出ても窓の外は真っ暗なことはよくありますが・・・)。これまで私はタイからの留学生と一緒に実験してきました。それがきっかけで、タイ料理屋に行って異文化交流することもはや恒例となっています。保健学科の雰囲気とは異なる環境で研究生活を送ってきたことは私にとって貴重な財産です。

最後に、数年間の研究成果がようやく実り、私にとってこの受賞は自信になりました。一つのことばに夢中になれば必ずチャンスが訪れるということを実感しました。そして、本大学院の発展に少しでも貢献できたかと思うと大変光栄に思います。





# 報告事項

## サステナビリティ・ウィーク2010参加

北海道大学は持続可能な社会の実現に向け2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催しております。今年の展開キーワードは「健康・衛生・社会福祉・高齢化社会」となっており、保健科学研究院でも下記のとおり2つの事業について参加することになりました。多くの皆様の参加をお待ちしております。

開催期間	11月2日(火) 13:00~15:00
主催者	大学院保健科学研究院
共催	環境健康科学研究教育センター、女性研究者支援室
会場	学術交流会館小講堂
行事概要	<p>子どもの未来可能性を大切にす社会の実現をめざし、子どもの体力と健康、子どもの精神発達、文化と子育て、男女共生社会における子育ての観点から、議論を行います。</p> <p>少子高齢社会に突入し、日本の人口は減少し始めました。未来を担う子どもが健やかに育ち、世界につながる新しい日本を創造することが大切です。</p> <p>子どもの健康や子育てに関心を持つ市民、学生、専門家が集まり、子どもの未来可能性を広げる社会の実現を一緒に考えましょう。</p>
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp
開催期間	11月3日(水・祝) 13:00~16:00
主催者	大学院保健科学研究院公開講座委員会
会場	保健科学研究院 6階会議室
行事概要	<p>健康の質の向上を目指した研究動向について、健康科学の基礎から生活機能を改善する応用技術まで幅広く最新の成果を3時間で紹介します。</p> <p>特に、①生活習慣病の予防を目指した蛋白性食品の機能性評価の研究、②自閉症、アスペルガー障害などの診断と治療の研究、③身体の安定性を考慮した理想的な車いす・オフィスチェアの開発、に焦点を当てます。</p> <p>保健医療に関する基礎科学や、介護福祉等に資する技術に関心のある市民、高校生、大学生、専門家の参加をお待ちしています。</p>
事前申し込み	10月29日(金) までにウェブサイト・下記 E-mailもしくは電話でお申し込みください。
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

## 平成23年度北海道大学大学院保健科学院保健科学専攻修士課程入学説明会開催

日時 平成22年6月24日(木) 18:00~  
 場所 保健科学研究院3-1講義室  
 参加者 49名(学外5名, 学内44名)

## 平成22年度文部科学省科学研究費採択一覧

### 【新学術領域】

福島 順子（機能回復学分野 教授）継続（H21～H22）  
「青年期自閉性障害の表情認知における脳機能画像」

### 【基盤研究B】

西岡 健（医用生体理工学分野 教授）継続（H20～H22）  
「放射線照射を生き延びた癌細胞に秘められた謎：癌根絶への多角的アプローチ」

齋藤 健（創成看護学分野 教授）継続（H21～H23）  
「高次神経活動の制御に係わる必須微量元素動態の解明」

林 裕子（基盤看護学分野 准教授）新規（H22～H24）  
「生理学に基づいた意識障害患者への看護プログラムの構築」

### 【基盤研究C】

河原田まり子（創成看護学分野 准教授）継続（H20～H22）  
「労働者を対象としたストレスマネジメントプログラムの効果に関する無作為化介入研究」

山内 太郎（創成看護学分野 准教授）継続（H20～H22）  
「開発と急速な経済発展の渦中にある途上国都市部における子どもの身体と環境適応能」

石津 明洋（病態解析学分野 教授）継続（H20～H22）  
「血管炎発症機序の解明と新しい分子標的治療法および病態診断法の開発」

加藤千恵次（病態解析学分野 准教授）継続（H20～H22）  
「ルビジウム82心筋PETによる虚血性心疾患の早期診断法の開発」

福島 順子（機能回復学分野 教授）継続（H20～H22）  
「高齢者の姿勢調節とその学習効果—視線移動と視覚刺激の影響—」

傳田 健三（生活機能学分野 教授）継続（H20～H22）  
「児童・青年期の気分障害、注意欠陥多動性障害および広汎性発達障害に関する疫学的研究」

良村 貞子（基盤看護学分野 教授）継続（H21～H23）  
「医師の事前指示に基づく看護職者の薬剤管理における裁量と法的責任」

鷲見 尚己（基盤看護学分野 准教授）継続（H21～H23）  
「がん患者の在宅療養に向けた看護者間のネットワークシステムの構築」

矢野 理香（基盤看護学分野 講師）継続（H21～H23）  
「脳血管障害患者を対象とした手浴ケアモデルの検証」

佐伯 和子（創成看護学分野 教授）継続（H21～H23）  
「保健師学生が政策に関する基礎的能力を獲得するための効果的な教育カリキュラムの開発」

山本 徹（医用生体理工学分野 教授）継続（H21～H23）  
「賦活領域の微細構造解析」

山口 博之（病態解析学分野 教授）継続（H21～H23）  
「肺炎クラミジアの感染細胞内での生存・増殖様式を決定づける宿主応答と分子基盤の解明」

吉田 繁（病態解析学分野 助教）継続（H21～H23）  
「皮膚癌の免疫監視回避機構の解析と臨床検査への応用」

浅賀 忠義（機能回復学分野 准教授）継続（H21～H23）  
「姿勢制御における筋シナジーと運動学習に関する研究」

伊達 広行（医用生体理工学分野 教授）新規（H22～H24）  
「放射線被曝影響解析に向けた線量付与の統計的モデルの構築」

### 【挑戦的萌芽】

宮島 直子（基盤看護学分野 准教授）継続（H21～H23）

「高齢者の精神機能を高める看護コミュニケーション・スキルの開発」

齋藤 健（創成看護学分野 教授）新規（H22～H24）

「環境汚染化学物質による中枢神経系に対する影響の多角的評価法の構築」

### 【若手研究B】

渡辺 玲奈（基盤看護学分野 助教）継続（H20～H22）

「急性期病棟でのチームナーシングにおける小規模看護チーム単位と看護拠点の再構築」

高山 望（基盤看護学分野 助教）継続（H21～H23）

「脳卒中による右大脳半球損傷患者におけるコミュニケーションの課題と看護介入の検討」

寺下 貴美（医用生体理工学分野 助教）継続（H21～H23）

「ドクターヘリにおける費用効果分析と導入予定地域における費用効果シミュレーション」

齊藤 展士（機能回復学分野 助教）継続（H21～H23）

「運動学習に影響を及ぼす姿勢制御の学習メカニズムの解明」

笠原 敏史（機能回復学分野 助教）継続（H21～H23）

「随意的連続運動課題時の運動制御と筋の特性についての研究」

堤 香織（医用生体理工学分野 助教）新規（H22～H23）

「放射線を生残した腫瘍細胞におけるニューロピリンの機能解析」

荻田 珠江（創成看護学分野 助教）新規（H22～H24）

「病院・診療所における産婦の主体的な出産を達成する助産ケアとその特殊性」

平野美千代（創成看護学分野 助教）新規（H22～H24）

「効果的な介護予防ケアの推進に向けた要支援前期高齢女性の社会活動尺度の開発」

### 【特別研究員奨励費】

田村 彰吾（博士後期課程1年）新規（H22～H24）

「脳由来神経栄養因子(BDNF)の循環血液中における存在様式の解明」

## 研究助成採択状況(平成22年2月～22年6月)

### 【(財)伊東医薬学術交流財団 海外学会等出席研究交流助成】

齊藤 展士（機能回復学分野 助教）

「International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy」

### 【テルモ科学技術振興財団 小規模研究会等の集会助成】

森山 隆則（病態解析学分野 教授）

「第61回日本電気泳動学会総会」

## 受賞状況(平成22年4月～22年6月)

### 【日本臨床化学会奨励賞】

櫻井 俊宏（博士後期課程1年）

「動的光散乱及び原子間力顕微鏡を用いたリポ蛋白粒径測定法の開発」

### 【第80回日本衛生学会学術総会会長賞受賞(優秀口頭発表賞)】

西村 亮（修士課程1年）

「各種ウコン中のクルクミノイドおよび微量金属含有量の分析と関連性の検討」

### 【第33回日本血栓止血学会学術集会優秀ポスター賞】

田村 彰吾（博士後期課程1年）

「血小板における脳由来神経栄養因子(BDNF)の局在とthrombin系刺激による放出動態の検討」

## 人事異動

平成22年3月31日

(定年) 堀田 文雄 医学系事務部総務課係長(庶務担当)  
(任期満了) 木下 彰 医学系事務部総務課嘱託職員(図書担当)  
尾崎 慕子 医学系事務部総務課事務補助員(庶務担当)  
(辞職) 赤間 明子 創成看護学分野講師

平成22年4月1日

(採用) 大内 潤子 基盤看護学分野助教  
本田 光 創成看護学分野助教  
武田 晴治 病態解析学分野特任助教  
綾女 朋美 病態解析学分野技術補佐員  
(昇任) 菊池 洋美 医学系事務部総務課係長(庶務担当)  
(医学系事務部総務課主任(庶務担当))  
(転入) 石川由香里 医学系事務部総務課主任(教務担当)  
(農学事務部主任(学生支援担当))  
佐々木えり子 医学系事務部総務課係員(庶務担当)  
(獣医学研究科・獣医学部係員(庶務担当))  
山家 尚子 医学系事務部総務課係員(図書担当)  
(理学・生命科学事務部係員(図書担当))  
小峯 邦夫 医学系事務部総務課嘱託職員(図書担当)  
(附属図書館管理課嘱託職員(庶務担当))  
(転出) 江島 正博 学務部学生支援課係長(福利・厚生担当)  
(医学系事務部総務課係長(教務担当))  
片桐 明子 財務部経理課主任(経理担当)  
(医学系事務部総務課主任(庶務担当))  
小林 泰名 釧路工業高等専門学校総務課図書係長  
(医学系事務部総務課(図書担当))

平成22年4月12日

(採用) 松原 和美 医学系事務部総務課事務補助員(庶務担当)

平成22年6月9日

(転入) 四宮ちひろ 医学系事務部総務課事務補助員(図書担当)  
(附属図書館管理課事務補助員(庶務担当))  
(転出) 小峯 邦夫 附属図書館管理課嘱託職員(庶務担当)  
(医学系事務部総務課嘱託職員(図書担当))

### 広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシアの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシア語で「広い」を意味するplatys(プラテュス、ギリシア語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

#### 広報室(編集委員)

伊達 広行(広報室長)  
山内 太郎, 横澤 宏一  
小野塚 久夫, 境 信哉  
渡辺 玲奈  
菊池 洋美(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室  
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目  
連絡先 庶務担当  
電話 011-706-3315  
E-mail web@hs.hokudai.ac.jp  
URL http://www.hs.hokudai.ac.jp